

人文学部プロジェクト活動報告

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています。（右は代表者。）

刊行物助成

英語と英米文学	宮原一成
独仏文学	下寄正利
山口地域社会研究	速水聖子
アジアの歴史と文化	阿部泰記
山口大学哲学研究会	脇條靖弘

研究推進体

東日本大震災における避難者のリスク意識と 社会的ネットワークに関する比較研究	高橋征仁
やまぐち学推進プロジェクト	坪郷英彦

『英語と英米文学』

本誌『英語と英米文学』は、山口大学文理学部・教育学部・教養部の英語関係教員を母体とする同人の紀要として 1965 年に創刊され、以来年に 1 回の発刊ペースで着実に号を重ねている。創刊時の編集責任の欄には、「山口大学文理学部英米文学研究室」と表示されていた。現在は、人文学部の英語学・英米文学コースの教員を中核とし、山口大学の教育学部・経済学部・工学部・留学生センターに在籍する英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化の研究者たちが集い、ベテラン・若手の区別なく、それぞれの研究成果を報告し披瀝する媒体として、有効に機能している。また、掲載された論文や記事は、電子版が山口大学学術機関リポジトリ YUNOCA を通して順次閲覧できるようになっている。

本誌は、本学教員がまず研究の萌芽的な段階や基礎データの集積という段階で論考を公刊し、それを足がかりにして、将来より深化した研究成果へつなげるという、一種の修練の場として活用されることが多い。実際、本誌に発表された研究論文が、結果的に、その後学術誌に採用される査読論文の布石となった事例が少なくない。

だが、それは本誌に収録されている論文の完成度が低いという意味ではない。それぞれに完成された本格派の良質な論文がそろっており、他の文献に引用される論文がこれまでいくつも掲載されてきた。学問水準の面からも内外から評価されている紀要である。大学全体もしくは学部単位で発行される紀要とはひと味違う、英語関連分野に特化した学術紀要として、学外研究者からも重宝されている。

平成 25 年度内に第 48 号を刊行する。収

録予定の記事は、

池園宏 (人文学部教授)、「Kazuo Ishiguro, *When We Were Orphans* における過去の再構築」【論文・英文学】

宮崎充保 (経済学部教授)、「*Heart Matters: Short Stories by Yamamoto, Shugoro (2): A Translation*」【翻訳作品】

以上の 2 本である。この各記事も、冊子体で刊行された直後に、電子化公開の手配をすることにしている。

(宮原一成)

『独仏文学』

山口大学『独仏文学』は、山口大学独仏文学研究会が年 1 回刊行している学術誌で、今年度で第 35 号となる。

山口大学独仏文学研究会は、ドイツ語学・文学あるいはフランス語学・文学を研究領域としている教員の内の希望者を正会員とし、その他、元正会員だった者の内の希望者を名誉会員、更に、ドイツ語・ドイツ語学・ドイツ文学あるいはフランス語・フランス語学・フランス文学の非常勤講師の内の希望者を準会員としている。

第 35 号の掲載論文は、次の 3 本である。

Memoiren, Tagebücher und Briefe von Kindern und Jugendlichen, die während der Shoah gelebt haben – Auswahl-bibliographie

Felicitas Dobra

Natsume Sōsekis Übersetzungen in das

Deutsche. Eine Fallstudie zur (Nicht-) Rezeption außereuropäischer Literatur
Franz Hintereder-Emde

古高ドイツ語 Isidor における属格付加語の位置(1)

下寄 正利

執筆者は 3 名とも正会員で、内、Franz Hintereder-Emde と下寄正利は人文学部所属である。

(下寄正利)

山口地域社会研究

「山口地域社会研究」プロジェクトは、山口地域社会学会の研究活動より成り立っている。

2013 年は、3 月、7 月に 2 回の研究例会を開催した。このうち、3 月 9 日の第 32 回研究例会は、山口大学研究推進体「東日本大震災における避難者のリスク意識と社会的ネットワークに関する比較研究」および山口大学人文学部との共催でシンポジウム「東日本大震災 3 年目の課題—山口で考える広域避難と被災者支援のあり方—」を開催した。山口地域社会学会の会員をはじめ、多くの市民も参加する中で、社会学研究者による震災被災地・避難者支援の調査研究報告に加えて、当事者である避難者・避難者支援に関わる団体からの報告が発表され、活発な質疑応答・討論が展開された。

なお、今年度の研究例会の成果を踏まえて、学術雑誌『やまぐち地域社会研究』(第 11 号)を 3 月に刊行する予定であり、現在、編集作業を進めているところである。

(速水聖子)

『アジアの歴史と文化』

私たちの研究誌『アジアの歴史と文化』は山口大学とその関係者（退職した教員、国外の学術交流者など）の中国学を中心とする学術研究の成果を国内外に伝えることを目的としています。研究会の前身は文理学部時代の山口支那学会であり、「中国の歴史と文化」2巻を刊行しました。人文学部になって漢籍調査班を組織し、『明倫館漢籍・準漢籍目録』等の目録を編纂しましたが、最近はおもっぱら研究誌『アジアの歴史と文化』の刊行に努め、人文学部プロジェクト研究経費の支援を得て定期刊行し、学界に新説を発表しております。18号は言語学、文学、歴史学、社会学、芸術学の各方面からの論述を掲載しました。目次は以下のとおりです。

- 富平美波「方中履『切字釈疑』「方言」の条を読む（「切字釈疑」第10節訳注）」
- 阿部泰記「四川の宣講書『萃美集』五巻一物語化する案証」
- 林宇萍・阿部泰記「漢川善書の台書上演—『奎星下界』を例として」
- 盧薇薇「中国「80後」の「青春文学」に対する日本流行文化の影響」
- 馬彪「唯一一部出自家學的斷代史“正史”—《漢書》導讀」
- 何曉毅「關於日本小説在中国的受容的調查」
- 桂勝・陸朋「老莊社會心理調適智慧研究」
- 孟修祥「先秦楚歌發展歷程論略」
- 胡翼鵬「社會理想與隱逸情懷—以陶淵明為中心的考察」

- 雷小虎「從詩詞窺探宋人的長安情結」
- 章芳「《西廂記》中崔老夫人形象新探」
- 鄒小娟「中國晚清女性解放小説中的西方女性形象—以頤瑣小説《黃繡球》為例」
- 周麗玲「荊州花鼓戲發生及傳承的相關研究述評」

これからも私たちはアジアの歴史と文化に関する調査研究成果を積極的に発表していきたいと考えております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

(阿部泰記)

山口大学哲学研究会

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学、思想系の教員を中心とした組織で、会誌の発行、合評会、研究発表会などの活動を行っています。現在正会員(学内の常勤教員である会員)は12名ですが、そのうち、人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、柏木寧子、村上龍、栗原剛、藤川哲、周藤多紀、脇條靖弘です。他学部の正会員は、岡村康夫(教育学部)、佐野之人(同)、村上林造(同)、山本勝也(経済学部)、青山拓央(時間学研究所)の6名です。

また、名誉会員(過去に山口大学に所属していたことのある学外の会員)18名のうち、元人文学部の教員は、上野修、遠藤徹、奥津聖、加藤和哉、木村武史、武宮諦、外山紀久子、林文孝、頼住光子、田中均、古荘真敬の12名です。

2013年度には、『山口大学哲学研究』第21巻を発行する予定(3月発行予定)です。柏木、青山、山本、佐野、アラム、脇條の6名が論文等を執筆し、全140ページ

の分量となる予定です。人文学部から助成された平成二十三年度研究経費に係る戦略的経費(研究プロジェクト助成)は、印刷、製本費用の一部に充てました。

(脇條靖弘)

東日本大震災における避難者のリスク意識と社会的ネットワークに関する比較研究

この研究推進体は、平成24年10月に認定され、現在、ようやく1年を過ぎたばかりである。人文学部からは、横田尚俊、速水聖子、岡邊健、高橋征仁の4名、教育学部からは田中理絵1名が、この研究推進体に参加している。

この研究組織の特色は、東日本大震災における避難者や支援活動の現状と課題について、西日本地域を中心に総合的な調査研究を行う点にある。東日本大震災を契機に避難した人々のリスク意識や社会的ネットワークは、福島県内に留まった避難者や山形・新潟などの近県避難者とは、大きく異なっている。また、そうした避難者の特性に応じて、支援する側のネットワークや支援内容も大きく異なっている。こうした観点からの研究プロジェクトは、日本国内でもほとんど類例がない。

昨年3月には、吉田キャンパス1番教室にて、公開シンポジウム「東日本大震災3年目の課題—山口で考える広域避難と被災者支援のあり方—」を開催した。このシンポジウムでは、研究推進体の成果を地域住民に紹介しただけでなく、福島大学や名古屋大学の研究者の発表や震災避難者・支援者からの報告も加えて、東日本大震災をめ

ぐる現状と課題について、地域住民に広く問いかけた。今年度も引き続き、公開シンポジウム「東日本大震災から3年を迎えて—今、そしてこれから必要な支援を考える—」(3月8日、大学会館)の開催を予定している。

このほか研究推進体の活動成果としては、学術論文5本、学会発表10本、外部資金の獲得2件(科研費、カシオ財団)が挙げられる。なかでも、日本社会学会大会シンポジウムでの研究発表(横田)や、ロンドン大学UK-Japan Symposium on Disastersでの研究発表(高橋)は、この研究推進体の重要性を国内外に示すものであった。

(高橋征仁)

やまぐち学推進プロジェクト

やまぐち学推進プロジェクトの今年度の活動は、前年度までの代表であった田中誠二教授(現名誉教授)の退職をうけ、新たな活動をどのように進めるかを話し合うことから始まった。平成25年5月16日に開かれた第1回の全体会での話し合いでは、これまでの基本方針は受け継ぐこと、その中で本年度は研究中心、自己研鑽の活動に集中し、併行して次年度以降の具体的活動を模索する年とした。また11月14日に開かれた第2回の全体会では、今後の活動として、山口大学の人文学部を含む文系分野からの発信テーマとして「やまぐち学」はますます重要になりつつあることをふまえ、個別研究に限らず、地域研究者との連携研究の企画、学生を巻き込んだ総合調査プロジェクトの企画など様々なアイデアが示された。

当プロジェクトの研究会については4回開催し、山口県域に関わる歴史的テーマの研究はもとより山口に関わらない話題提供も含めて様々な分野の研究発表がなされ、意見交換が行われた。その概要は以下の通りである。

第1回研究会：平成25年9月20日

人文・理学部管理棟4階 第1小会議室
真木隆行（人文学部）「高嶺大神宮創建と中世山口」

第2回研究会：平成25年9月20日

人文・理学部管理棟4階 第1小会議室
木部和昭（経済学部）「近世防長地域における魚問屋仕入制と海域類型」

第3回研究会：平成25年11月14日

大原山口大学就職支援施設研究室3号室
坪郷英彦（人文学部）「角館祭りの調査から —山車及び町空間の視点から—」

第4回研究会：平成25年12月5日

大原山口大学就職支援施設研究室3号室
村田裕一（人文学部）「山口県域弥生時代後期の鍛冶技術」

なお当プロジェクトでは、研究誌『やまぐち学の構築』第10号を平成26年3月に発刊予定である。

（坪郷英彦）